

# 東京バッハ合唱団 月報

[第 637 号] 2015 年 7 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101  
Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604  
Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 637

July 2015

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## [座談会]

### 創立 50 周年記念の全イベントを終えて

高梨公明 (ゲスト、春秋社編集部)、大村恵美子 (主宰者)  
小海基 (団員、荻窪教会牧師)、記念誌編集委員会

創立 50 周年記念の全イベントの最後の成果、『東京バッハ合唱団 半世紀の歩み——創立 50 周年記念誌——』(2015 年 4 月 30 日発行、B5 判 240 頁) を手にして、編集委員会の委員 10 名が集まり、感懐を披露してみよう、という趣旨で、主宰者大村恵美子が呼びかけ、ただお 1 人のお客様、高梨公明氏に加わっていただき、約 2 時間という短い時間で、月報内容としての座談会が催されました(2015 年 6 月 21 日、午後 7 時より)。

10 名の委員中、欠席は岡村、風岡、本田、村山の 4 名。もう 1 人、現在土曜の練習場に使用させていただいている荻窪教会の小海基牧師にも、日曜の礼拝後で、しかも翌 22 日から韓国に数日間出張という超ご多忙の中をやりくりして参加していただきました。

ちょうど『スクリャービン全集』最終巻出版の追い込み最中の高梨様になるべく近いところと考え、会場は、春秋社から徒歩数分のホテル・ガーデンパレスを選びました。

この記事の文責は大村恵美子とし、とりあえず記念誌中に含まれた、高梨・小海両氏と編集委員全員(この日の欠席者も含め)の執筆記事掲載の箇所を記しておきます。短時間の座談会では言いつくせなかったものを充填させる意味で、ご参照ください。

高梨公明 (団員) p.127, 160, 169, 175, 178

小海 基 (団員 T) p.27, 87, 137, 139, 173

<以下編集委員>

荒井せつ子 (S) p.49

風岡和子 (A) p.51

大村健二 (T) p.6 編集, 95, 133, 149, 164 編集, 181 事務局

宮城幸義 (T) -

村山英司 (T) p.53

岡村 隆 (B) p.30, 54

加藤剛男 (B) p.5, 31, 55, 130, 237

本田茂樹 (B) p.33, 57

松尾茂春 (B) p.58, 61, 63, 166

森永毅彦 (B) p.13, 61

大村(恵) この座談会は、それぞれにお忙しい方々が 9 人も集まるのですから、わずか 2 時間の会合を予

約して始めることにしました。順不同の席順に従って、第 1 に高梨様、最後は荒井さんとなります。1 回ずつの発言で時間切れとなるかもしれませんが、質問や関連エピソードなども随時気楽に挿入してください。

[終了後の結びはせず、尻切れトンボになる失礼は、今からお詫びしますが、じつは冒頭の高梨様から始まって、だんだん発言者が増すごとに、21 世紀の新しい地球社会の方向付けと、バッハ敷衍の活動とは、密着したものになるにちがいない、という出席者全員の気分の高まりが実感できる集いとなってしまいました。]

高梨 あまり構えない、気楽な座談会ということで、最初に発言順を指定されてしまいました。この『記念誌』をいただいて、全く偉大な歩みに、感動しているところです。バッハとの出会い、そしてこの合唱団との出会いは、2011 年 3 月 11 日のあの災害の直後、3 月 20 日発行となった大村ご夫妻の『バッハ コラール・ハンドブック』に携わらせていただいたのが、大きなご縁でしたが、それ以前にも、私個人バッハは大好き、春秋社社長(現会長)の神田明氏も同様でしたので、東川清一氏、樋口隆一氏とおつき合いがあったので、東京バッハ合唱団の定演を何度か聴いていました。

樋口氏著の『バッハから広がる世界』(2006 年刊、春秋社)の中で、この合唱団の活動に触れておられますので、ちょっと紹介します。



■ 2015 年 6 月 21 日(日)。文京区湯島・東京ガーデンパレス

カンタータや受難曲の演奏もかなり頻繁に行われるようになった。教会音楽専門誌『教会と音楽』の演奏会案内によれば、1995年1月～4月に、『マタイ受難曲』1回、『ヨハネ受難曲』が4回、『クリスマス・オラトリオ』の第1部から第3部までが1回、さらに教会カンタータの演奏会が7回予定されている。地域的にも東京大阪に留まらず、青森県弘前から四国の香川や松山にまで及んでいる。さらに同誌によれば「バッハ専門の合唱団」が全国でじつに33団体に加えて、バッハをしぼしば取り上げる合唱団やバッハに関係する31団体の名が挙げられている。またこれらの情報が、みずからも「我孫子バッハ研究会合唱団」を主催する山下広之氏〔元団員・現後援会員〕が自費出版するミニコミ誌『バッハの合唱』の記事に基づいて作られているという事実も驚嘆に値することではなからうか。

全国にまたがるこれらの合唱団の全貌を把握することは不可能に近いが、中でも活発な活動をしているものとして、30年以上の歴史を誇る「東京バッハ合唱団」(大村恵美子指揮)、東京芸術大学の学生を中心に運営され、多くのバッハ演奏家を輩出してきた「東京芸術大学バッハ・カンタータクラブ」、オリジナル楽器を用いて定期的な活動を行っている「バッハ・コレギウム・ジャパン」(鈴木雅明指揮)や「京都バッハ・ゾリステン」(福永吉宏指揮)などが挙げられる。(p.102-103、「日本のバッハ受容」の章、執筆1995年)

50年もの長きにわたって、たゆみない前進を続けて来られたのは、何としても誇れることです。願わくは、聴衆がこれからもどんどんふえてゆきますように。

この『記念誌』を読み、さらにさかのぼって『東京バッハ合唱団 三十年の歴史』(1986年)を読み返したのですが、この『三十年の歴史』の始めに、「反権威主義」を述べておられますね。この姿勢が、今に至るまで一貫されています。それがバッハ音楽の母語(邦訳)演奏となっている。樋口氏の前述の引用で、活発な活動を続けているものとして、①東京バッハ合唱団、②東京芸術大学バッハ・カンタータクラブ、③バッハ・コレギウム・ジャパン、④京都バッハ・ゾリステン、これら4団体を特筆しておられる、そのうちアマチュアで唯一存続しているのが、ここの合唱団です。

まさに継続は力なのです。そして、さっき言いかけた大村さんの「反権威主義」ですが、音楽とは自由なもの、という意味だと、活発な継続の間に、はっきり知らされてきたのです。あの淡野弓子さん(シュツツ合唱団主宰)との対談(記念誌 p.69)も、そうですね。権威主義や教養主義からは程遠いものが、真実であり、終極のものであるということですね。

**大村(恵)** 日本の文化には、教養主義が根深く、外来のものを、押し戴くという姿勢で始め、そのうち、日本固有の形に変わってゆく、という、深層の無意識な

変化が特長ですね。普遍性のあるものは、自然に日本に適した形の伝統になってゆくのです。

私たちがこれまでバッハの故郷詣でとしてドイツに巡演しましたが、受け入れ側は、「うん、よく出来ましたよ」という感じではなく、「心が一つになりました。今度はいつ聞かせに来てくれるのですか」と、積極的なのです。やはり、ほんとうの聴衆はここに待っているのだと感じました。

いつも言うのですが、[私は人間のあり方として、スポンタネ(spontané、生まれたままの、自発的な)を理想としていて]生まれてすぐの赤ん坊は、どの時代でも高貴で、下品な子はいない。そして、バッハの音楽は、生まれて間もない子どもにも、本能的に愛される。G線上のアリアとか、カンタータ147番のコーラルとか、カンタータ106番の冒頭、これを聞けばすぐに安眠するという子まで知っています。現代音楽は、非連続な音の扱ひも多いのですが、イタリアは現代ものでもメロディックです。そして、理知的でとっつきにくいと非難されがちなバッハにも、子どもに好かれるような、旋律の美しさも充分あるのです。先入見や固定観念に基づく、バッハの硬いという印象をとり除いてゆくのが、私のねらいでもあるのです。子どもの直観が、人類共通のものへとつながるように、わたしは信じているのです。

**小海** 牧師であるわたしから見ても、バッハの音楽のほうが、キリスト教よりも、日本人に受容されています。キリスト教会の低迷と比べて、バッハ音楽の伸び方は著しいでしょう。冒頭に「反権威主義」を書かれた著書が1986年の刊[執筆は1972年]ですから、ベルリンの壁崩壊(1989年)よりも前で、大村先生はずっとドイツのことをわがことのように感じてこられたように思います。そして、すでに1950年のバッハ没後200年のときにも、日本国内ではカンタータはまだほとんど聴けなかったと気づいておられる(『三十年の歴史』p.17)。そして、ご自身50年かけて、日本語でどんどん伝えて来られました。2006年にはもう、カンタータの全訳が出来上がったようで、2011年の『バッハコーラル・ハンドブック』は画期的なものになった。日本語で歌えることで、バッハがコーラルに触発される面白さが、私たちにもしっかりと伝わって来たのです。[17世紀の三十年戦争の時期に無数に生まれた]コーラルを、これからもひき続き訳してほしいものです。

**森永** わたしたちの演奏会は、毎回「出来事としてのコンサート」という印象になるのですが、とりわけ3.11(2011年)の大災害に出逢ってからは、すべてのイメージが、がらりと変わりました。

2010年は、定期演奏会が1回しかない年でした。例年欠かさずに続いていた8月の野尻湖合宿と神山教会コンサートもとりやめて、『ロ短調ミサ曲』を、初めてラテン語でなく、日本語で演奏することに備え、真夏

の強化練習が組まれたのです。さて、年が明けてすぐの定期演奏会（第105回、2011.1.9）を終え、いよいよ《ロ短調ミサ曲》の本格練習に戻った途端、あの3.11が起きて、今までとは全く違った何かが始まりました。定演の当日（第106回、2011.12.9）、ステージで開始の瞬間を待っていると、いつもは期待で何かざわついてきた客席が、このときはシーンとしていました。身を乗り出した表情です。それに応えて、〈キリエ〉の、戦慄を呼ぶ冒頭。客席・ステージ両方を切り結ぶような体験でした。

2012年7月8日、アルカディア市ヶ谷、創立50周年記念懇親会では、挨拶をさせられることになり、スピーチの内容を考えました（記念誌 p.13）。まず、この合唱団を始められた大村先生は、合唱団の前史、どこから出てこられたのだろう、という気に駆られたのです。そして、『バッハ合唱団の十年』その他、例の「反権威主義」の由来に思いをめぐらして、先生は、ごく早い時期から、バッハ、すなわちその祖国ドイツの運命を、自分の運命と感じて来られた。バッハを歌うことに人類の運命の必然性を持って、時々刻々、立ち止まらずに、現実のものとして挑戦してゆかれるのですね。これは、いつの時期も今も、一貫しています。

2002年8月の月報では、私自身の「入団までと入団後」を書きましたが（記念誌 p.61）、ここで私はすでに、音楽の自由のことをとりあげています。「バッハが繰り返し〈パロディー〉を試みているということは、両者の関連を生きた自由なそれとして確定すべきことを物語るものである。日本語演奏の試みも、結局この自由とかかわってくる。」

**宮城** 2011年の《ロ短調ミサ曲》は、エポックメイキングなことでした。ステージで歌った私たちも、あとから感想を伝えてくれた聴衆も、冒頭の〈キリエ〉から、もう鳥肌の立つような感動に打たれっぱなしで、言葉になり得ない有様でした。ドライブアたる大村先生のエネルギー、飛び立つようなスピリットで、先生の長生きの正体ここにありの思いです。私たちもあやかって、末長くはげみたいと思います。

**大村（恵）** これまでにも、入団時には、身体の病状を訴えつづけていたような方も、しばらくすると忘れたように歌に専念し、晴ればれと元気になった例に事欠きません。我田引水ではないのですが、医学的統計をとれる人があったら、バッハの音楽が心療的治癒力を実際に証明出来ると言明してほしいと思います。今にも自死に至りそうまで引きこもっていた方が、私たちの練習に偶然立ちあって、忽ちモテットにのめりこみ、熱心な団員となられた、極端な好例もあります。

**松尾** 小さい時から親の影響もあってクラシックが好きでしたが、高校生のころ、たまたま聴いたバッハのカンタータ4番、102番、モテット3番、4番など、おどろきました。縁があってこの合唱団に入ったら、自分で歌ってみると段違いにおもしろい。そして、この

合唱団は、とても行動的で、毎年野尻湖・数年ごとのヨーロッパ巡演など、自分の世界がぐんと広がりました。また月報の充実ぶり、継続ぶりが、すごいのです。大村先生の行動力、緻密さ、持続力には、驚くほかありません。

**大村（健）** 先ほど、どなたかがおっしゃった「出来事としての演奏会」という点では、1988年8月の第2回ドイツ巡演が忘れられません。東ベルリンの3つの教会でコンサートを開いたのですが、夜の公演の終了後、多くの聴衆が、歌い終えたわれわれを待ち構えていて、異様な緊張があたり張りつめるなか [国家体制と教会との対峙は、このころ頂点に達していた]、あちこちに人垣ができていました。ぼくのところでは、老婦人が「メッセージを受け取りましたよ」ということを身振り手振りで伝えてくれました。東ドイツでこの年に何が起こっていたかはご存じのとおりで、ライプツィヒ（この2日後に同市へ移動）のニコライ教会の月曜祈祷会が路上デモに発展していった、大きなうねりになったのが、この同じ夏だったと後で知りました。壁崩壊の1年前、まさに「前夜」だったのです。

東ベルリンの市民がわれわれの歌うバッハ音楽から受け取った「メッセージ」（「福音」と同じ単語）は、自由主義圏からの解放の息吹だったに違いないと、今は確信しています。ちなみに、当夜の曲目は、モテットの2番《み霊 わが弱きを助く》、3番《イエス よろこび》、6番《頌めよ主を 世の民こそぞりて》と、これだけは日本語演奏によるカンタータ第6番《とどまれ我らと 夕闇せまり》でした。

メンデルスゾーンの《マタイ》蘇演を最初のピークとする「バッハ運動」が、19世紀のドイツの思想運動と重なり、20世紀のヒトラーにぶれたり、2つのバッハ全集を産み出したりしながら、東洋のわれわれにもつながっているなあ、と実感しています。

**加藤** 合唱団が始められて1ヵ月後に入団し、それからのことは、今回の『50周年記念誌』の隅々に語られている通りです。大村先生の強い信念を通じて、一貫した姿勢が日本大衆に根づかれるようになってきました。記念誌ははじめ、2012年発行の予定でしたが、どうせなら4大作品連続演奏の完結する2014年まで引き伸ばして、それらの定演の成果も含めようということになり、結局それでよかったです。

これを改めて読んでみて、とくに強いインパクトを覚えた2つの項目。①2013年の《マタイ受難曲》は、いくつかの面で苦労がありました。その1つは、児童合唱で、なかなか応募者が少なく、一策として、都内のキリスト教学校5校に交渉に行きました。ただ1校、立教小学校が応じてくださり、みごとな反応を示して、当日はりっぱな核となり、居合わせた皆さんから絶賛を浴びることになりました。成人したかれらが、私たちの中に入団してくれることを祈っています。

②2009年の第5回ヨーロッパ巡演。これは実現前に、

賛否両論が起こり、退団する団員も相いつぐリスクでしたが、数年前からの約束通り、シュトゥットガルトでは優秀な教会聖歌隊員方との合同演奏に成功し、フライブルクでは、カトリック大聖堂のミサでバッハのト短調とロ短調を歌うという、日独両方にとって異例中の異例、新しいエキキュメンカルな夢を実現させた、すばらしい成功例として、絶賛されました。私たちの合唱団にとっても、最高の世界的成功例でしょう。5回中いちばん参加人数の少ない(25名)、そしていちばん意義深く評価の高かった海外巡演となったのでした。

**荒井** 何もわからないづくしで、ただ入団したものの、団員のひとりとしてよく歌えるようにという努力をつづけ、演奏会の会計係まで仰せつかるまでになったのですが、私の知るかぎりでは第100回定演《マタイ受難曲》(2007年3月)が、団員数としてはピークだったのではないかと思います。その後団員半減の極端なリスク期も経験しましたが、それにもかかわらず、企画したイベントはみんな高い成果をあげたのでした。3.11のあの被災後は、別の世界が開けてしまいました。団員は大変熱心で、有能な方々が惜しげもなくその才能を注ぎこんで、落ちこむどころか、どれもこれも成功に導いてくださったので、もうびっくりしています。来たる8月の被災地・南相馬での定演も、これまでになかった新しい賜物がいただけることを期待しています。

**小海** かえりみると、この合唱団は、ブリューゲルの絵みたいに、歌う人ひとりひとりの顔がちゃんと見えて、一律ではない。テルツ少年合唱団のことも思い浮かびますが、気取りなく、村の子どもたちが自然な感動をまき起こしてくれるのです。ドイツも、西が発展して、統一時にはおくれていた東を受け入れた形に見られましたが、今にして思えば、1989年の壁崩壊以前には、ドイツの魂の純粋さは、東側に深く保たれていたのかもしれないのです。

**大村(恵)** 最近のメディアでは、フランスのエマニュエル・トッドが書いていたと思いますが(『「ドイツ帝国」が世界を破滅させる』文春文庫、2015年5月)、EUの停滞に活躍するドイツのメルケル首相の態度などから推測して、また「ドイツ帝国」が支配するおそれがあるなどの声もあがり始めています。日本も「八紘一宇」で対応しようなどと馬鹿なまねはしないよう、バッハ展開も、ただ好きだから、だけではなく、地球規模の人智がますます要求されるのでしょうか。

2時間はまたたく間に過ぎて、盛り上がった座談会は、残念ながらここで終わらなければなりません。ただニコニコ笑って場を和らげる日本人から、信念をわけへだてなくどの相手にも透明な言葉でしっかりと伝える、目覚めた日本人へと、私たちも急いで脱皮しなければなりませんね。(文責・大村恵美子)

## サポーター・後援会員・団友・月報読者の皆さま

### コンサートと催し物のご案内

#### ●プレコンサート@松原教会(東京・世田谷)

7月12日(日)、14:00開演(開場13:30)

会場:日本キリスト教団・松原教会

(京王線「明大前」、井之頭線「東松原」駅下車)

曲目:第112回定演(南相馬)曲目より

入場無料(詳細はチラシをご請求ください)

#### ●バザー(南相馬公演支援)&創立記念懇親会

7月18日(土)

バザー 17:00 - 17:30

会場:日本キリスト教団・荻窪教会

(ただし15:30-16:30は、新年度の団員総会開催)

懇親会 18:00 - 20:00

会場:居酒屋「さかなや道場」(荻窪駅・南口駅前。南口商店街入口ドラッグセガミの2階)

南相馬公演の壮行会と新入団員の歓迎会を兼ねます。

※要予約、事務局までお申込みください。

#### ●第112回定期演奏会(福島県・南相馬)

8月22日(土)、13:30開演

(13:00開場、16:00終了)

会場:南相馬市民文化会館(ゆめはっと)

曲目:BWV 92、復興支援ソング(賛助演奏)

BWV 81、BWV 227(モテット)

入場:前売り1000円(当日1200円)全席自由席

(詳細はチラシをご覧ください)

#### ●報告コンサート@荻窪教会(東京・杉並)

9月26日(土)、14:00開演

会場:日本キリスト教団・荻窪教会(土曜練習場)

出演:坂田和泉(Vn)、伊藤恵以子(Vc)

石川優歌(Org)

曲目:第112回定演(南相馬)曲目より

入場無料(詳細後報)

### <予告>

#### ●第113回定期演奏会「日常生活のバッハ」

2016年5月28日(土)、14:00開演

会場:府中の森芸術劇場ウィーンホール(東京・府中)

曲目:

・カンタータ BWV 148 《み名の栄光を讃えよ》

・カンタータ BWV 40 《地に來ませり 神のみ子》

・カンタータ BWV 16 《主 ほめ歌わん》

・カンタータ BWV 192 《ああ感謝せん 神に》

出演:佐々木まり子(A)、鏡貴之(T)、山本悠尋(B)

東京カンタータ室内管弦楽団(Orch)、他

(※本年9月より練習開始。合唱参加ご希望の方、事務局までお問合せください)

# 創立 50 周年記念誌 『東京バッハ合唱団 半世紀の歩み』

## ｜反響｜つづき

中村 美子（元団員・後援会員）

『半世紀の歩み』をお送りくださいました、まことにありがとうございました。懐かしさでいっぱいでございます。第3回ドイツ演奏旅行での南先生との日々は忘れられません。バッハで連なっていることを大きな喜びといたします。大村先生、どうぞお健やかに、ますますのご活躍をお祈りしています。

[中村美子氏は、長年アルトの団員としてご活躍。毎週月曜日、高崎から新幹線で通っていらっしゃいました]

猪狩 恭子（後援会員）

半世紀にわたるご活躍、ほんとうに「東京バッハ合唱団 萬歳 萬歳」と叫んでいます。深夜にDVDを見て、ひとりで指揮をなさる御後姿に釘付けになり、音楽に心ませ……、やっと、私もがんばらねばと、動き出すのです。お忙しいお働きのうちに、もう新しいご計画、パワーが満ちあふれておいでのご様子。どうぞくれぐれもご自愛のうえ、いつまでもご活躍をと、心からお祈り申し上げます。

[猪狩恭子氏は、主宰者の高校時代の同級生のお仲間として、団のサポートをつづけてくださっています]

武藤 京子（後援会員）

『半世紀の歩み』ありがとうございました。大村先生をはじめ、合唱団に連なるたくさんの方々の思いがいっぱい詰まった、ずっしりと重いご本、少しずつ読ませていただいております。

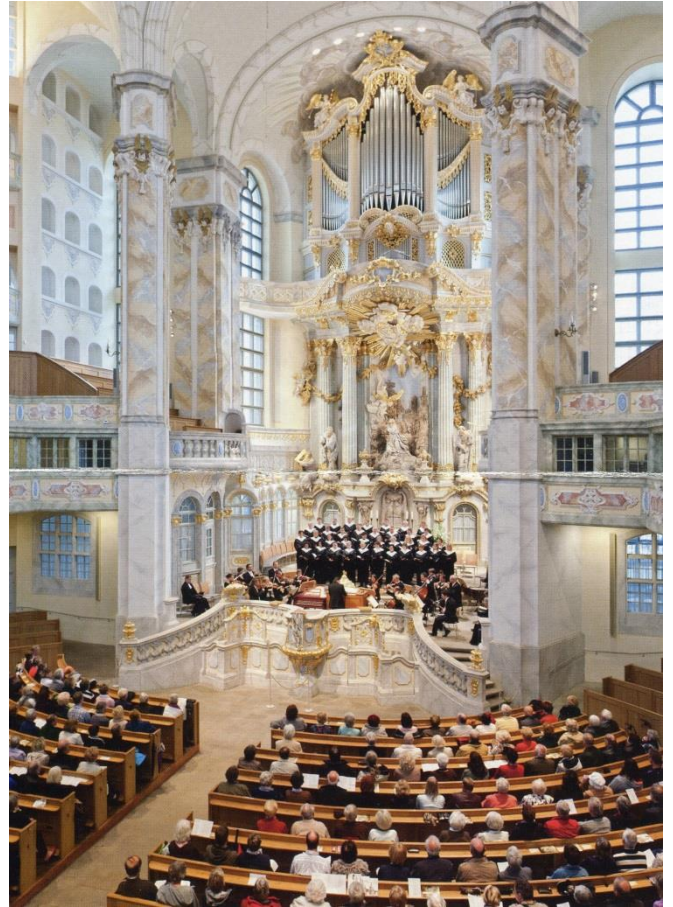
すっかり遅くなってしまいましたけれど、ご本のお礼とバザーの品物、少しですが送らせていただきます。皆さまのお気持ちの端に加えていただけたらうれしいです。福島での演奏会のご成功をお祈りしております。

[武藤京子氏は、毎回の定期公演のステージで、オルガンの草間美也子先生の助手をお務めくださっています。バザーのたびに献品くださり、長く団の応援をつづけてくださっています]

ワルブレヒト 幸子（団友、ドレスデン在住）

長らく御無沙汰してしまいました。

この度は『東京バッハ合唱団 半世紀の歩み』、月報（2月+3月）、南相馬公演のチラシ、および朝日新聞の切り抜きをお送りくださいました、どうも有難うございました。お元気に活躍されているのを知り、大変うれしく思います。



■2005年に再建されたドレスデン聖母教会と教会合唱団。筆者のワルブレヒト幸子さんは、前列右から5番目に見える（2013年）。

とくに今年8月には第112回定期演奏会を福島県南相馬市でされる由。そのステージでは、地元の合唱団も3曲の合唱を歌うということは良い案ですね。きっと沢山の方々がそれを聴きに來られて、バッハの音楽と故郷の合唱に慰められ、勇気と希望が与えられることでしょう。遠くから御成功と良い出会いをお祈りしています。

こちらは6月に入り、やっと初夏の気温になりました。6月13日には、2005年に再建されたFrauenkirche（聖母教会）の創立10周年記念の音楽会があり、リストのミサ・ソレムニス（グランのミサ）を歌います。難曲ですがソリストとオーケストラが一緒だと、リストらしい響きがするので、気に入っています。

3月号の月報で川戸龍夫さんが昇天されたことを知り、大変さびしく感じます。当時笑顔ですみれや私どもにも声をかけて下さっていたことを懐かしく思い出します。

お蔭さまで、こちらでは一同それぞれの地域で元気

に生活しています。皆からくれぐれもよろしくと申しています。

まだ予定は立っていませんが、次回はぜひ大村先生ご夫妻と再会したいと今から楽しみにしています。合唱団の方々にもどうぞよろしくお伝えください。

(2015年6月4日)

ドレスデン 2015年6月4日

今日、私はあなたたちご夫妻に、格別に思いを馳せています。ちょうど14年前のきょう、品川で、私は東京バッハ合唱団とご一緒に演奏する機会をもちえたからです。

(注：2001年6月4日、品川教会で「ワルブレヒト氏送別記念」演奏会を開催。同氏の指揮でカンタータ第106番が演奏された。訳者)

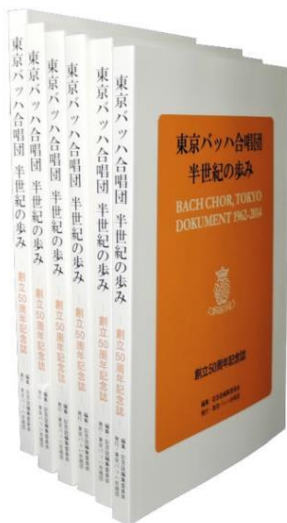
このたびは東京バッハ合唱団創立50周年記念誌をお贈りくださりまして有難うございました。心からお礼申しあげます。

皆さまとともに演奏した日々は、私にとって懐かしい思い出です。合唱団とオーケストラの皆さまにどうかよろしくお伝えください。

感謝の念をこめて  
ゲルハルト・ワルブレヒト

(訳・森永毅彦)

[ワルブレヒト幸子、ゲルハルト・ワルブレヒトご夫妻(記念誌 p.190 参照)は、1980年代に当時の東ドイツより来日された直後から、一家中で東京バッハ合唱団との親交を深められました。夫君は新日フィルのヴィオラ奏者を務めながら、われわれの定期演奏会にもオーケストラの一員として数多く協演。末娘のすみれさんは、ソプラノ団員として1988年のドイツ巡演に参加(当時小学低学年)、ワルブレヒト家の故地アイゼナハのバッハ像の前での、お祖父さまとの涙の再会がまぶたに蘇ってきます]



## 東京バッハ合唱団 半世紀の歩み

—創立50周年記念誌—

- ・B5判/240頁・頒価2000円
- ・送料350円 [残部僅少]

半世紀の金字塔、手にとってご覧ください。

創立50周年祝賀メッセージ、出演者の感懐、最近10年間の主なる月報記事再録、バッハ合唱団をとりまく人々(大村恵美子記)、創立より50年間のフォトアルバム、全公演記録・演奏曲目一覧など。

## | 時評 |

### 民衆の目線でものを言って

大村 恵美子 (主宰者)

朝日新聞、6月26日のインタビュー記事(17面)で、米プリンストン大学名誉教授のリチャード・フォークという人の意見が載っている(「国家」を超えて——軍事依存の外交で紛争は解決しない/I Sと対話の道も。国益追求に限界/人類益の時代へ新たな秩序築け)。

やっと今頃になってという思いがする。私は、I Sのハチャメチャな出現がニュースを賑わせ始めたときから、こう言っていた。「どんなに正しいと自称する側からでも、自分の住居が焼かれ、家族が殺され、空爆で逃げ場を失ってさまよい歩くことになれば、誰だってその直接の相手をずっと死ぬまで怨むものでしょう」と。

「ユダヤ系米国人であるあなたがイスラエルに批判的なことをどう理解すればいいでしょうか」という記者の問いに、この学者は、こう答えている。

ユダヤ系であることは生物学上の「亜種」としてのアイデンティティーで、私は「種」としては人間です。生物学上の亜種としてよりも、上位の概念である種としてのアイデンティティーを重視しているのです。世界の問題の多くは、国家、民族、宗教、文明など、亜種としての側面に重きを置きすぎることによって生じています。これほど相互に依存するグローバル化が進み、亜種への圧力が加わった結果、逆に亜種が強くなっているともいえるでしょう。

\*

民衆は、自分の身边を痛めつけられたからといって、その直接的痛みばかりに反応して、もっと公平な正義と邪悪の判断ができない、バカな連中だというのが、指導者たちの思い上がった気持ちでしょう。だから、わざわざアメリカの親分のお膝元までゴマすりに行き、「あなたが呼べば、どんなに遠くからでも飛んでゆくわ」というおのろけ唄を引用してみせる(訪米中の晩餐会で)、それが世界上位を誇りたくてしょうがない一国の総理大臣だというのだから、下品なこと極まりない!

自分の痛みの直接反応から、勢いついて国是をひっくり返すのが、底にうごめく民衆のバカ力でもあるということも、覚悟したほうがよろしい。おじいちゃん(岸信介)に甘え、あわよくばそのおじいちゃんをさえ、もっとうまく出し抜いて、ほめてもらいたいと執念を燃やしても、そのため夏中国会を開いて、何が何でも我意を押し通そうとあがいても、「亜種」よりも「種」が一斉に立ち上がったら、どんな想定外の方向にも動いてゆくのが、歴史の恐ろしさなんです。ただ同じ言い訳ばかりをくり返すだけで時間をかせいだ挙句に、多数決で決まり、そんなことが通るとは、誰にも分からないのですよ。